

## (インタビュー)「やさしい日本語」考 言語学者・庵功雄さん

有料会員記事

2021年6月16日 5時00分



庵功雄さん＝迫和義撮影



市区町村のウェブページや公共施設の案内などで、平仮名ばかりの文章を見かけることがある。「やさしい日本語」というらしい。目にすると、どうも奇妙な心地がする。幼児向けの本を読んでいるような……。日本語教育を専門にしている、言語学者の庵(いおり)功雄さんに聞いた。「やさしい」のは、誰のため、何のためですか。

——そもそも「やさしい日本語」とは何ですか。街などで平仮名ばかりの表記を見ることが増えましたが、定義はあるのですか。

「日本語の語彙(ごい)を絞って漢字を減らし、文のパターンを30種類ほどにします。例えば、条件を示す語として『(する)と』『(すれ)ば』『(し)たら』『(する)なら』がありますが、『やさしい日本語』では、『たら』しか使いません。ほかにも、『と思います』は使わず、『たぶん』だけにしますし、ほぼ同じ意味を表す文法形式が複数ある場合は、一つだけを使います。それでも、かなりの内容が伝えられるのです」

「26年前の阪神大震災では、多くの在日外国人が避難先などについての重要情報を得られず、二次被災しました。この経験を元に、災害時に大切な情報を伝えるために考案されたものです。最近では、日本人と外国人が意思疎通をするための共通言語として、平時にも使われるようになりました」

——日本語を簡単にするのではなく、英語や中国語といった多言語で表示したり、話したりするのは駄目なのでしょうか。

「国内に住む外国人を対象にした国立国語研究所の調査では、英語よりも日本語の方が『わかる』と答えた人が多いという結果が出ています。旅行者には英語が適していますが、長期定住者は日本語の方が理解しやすい。英語は日本人の側も得意とは言えません」

「それに、多言語といっても定住外国人の多くが話す主な言語だけでも20近くあり、すべてに応じるのは現実的ではありません」

——台風への警戒を呼びかけるため、「がいこくじんの みなさんへ」と平仮名だけを使ったNHKのツイートが、「ばかにしている」などと炎上したことがあります。「日本語が乱れる」と違和感を抱く人もいるようです。

「『やさしい日本語』は、外国人との会話のための道具です。日本人としては、場面に応じて使い分ければいいので、これだけで日本語が変わることはないでしょう。公共の場の英語表記と同じようなものなので、日本語ネイティブ(母語話者)がめくじらを立てる必要はないと、私は思います」

「日本語は、構造的に難しい言語とは言えませんが、漢字を使うという問題があります。いま増えているのは非漢字圏のベトナム、インドネシアなどからの定住者です。小学校高学年で来日した子が中学入学までに千字を覚えなければならないのは、相当に高いハードルでしょう。大人ならなおさらで、新たな数千の文字を区別し、それを使って仕事をしろと言われたら、できますか」



——外国人のためだけでなく、日本社会にとってのメリットがないと取り組みは進まないのでは。

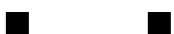
「少子化と人口減少に悩む日本にとって、日本人と同等の給料を稼いで税金を払い、家族で暮らす外国人を増やすことは極めて重要です。子どもたちはさらに大切に、遅くとも高校卒業時に同年代の日本人と同じ日本語レベルに達していないと、付加価値の高い職業にはつけない。不必要な難しさをそぎ落とした『やさしい日本語』をステップにして一定レベルに追いつけば、あとは自力で知識を得ることができます」

「その教育に税金が使われたとしても、能力を発揮できる大人に成長すれば財政や社会保障の担い手になります。逆に、もし日本語の習得に失敗すれば社会から孤立するでしょう。ここで考えるべきなのは『言語のバリアフリー』です。リターンできる人でなければ価値がないということではありませんが、持てる力を発揮できるようになるまでの『のりしろ』を社会が保障する、ということです」

——社会への還元ということですね。私たちが、個人として得られるものはありますか。

「ええ、あります。これは、菅義偉首相が記者会見の質問にまともに答えないことにもつながる話です。菅さんを批判するのは簡単ですが、自分たちも同様に、『言わなくても分かるだろう』と説明をせずに済ませていることが多い。異文化との接触は、この前提を変えます」

「例えば、自治会に入るよう外国人を説得するとしたら、何と言いますか。何をやる集まりなのか。予算は何に使うのか。日本人同士なら説明不要なことを平易な言葉で伝え、理解してもらわなければいけない。これはコミュニケーション能力を鍛える訓練になります。違う社会、違う文化に属する人に、自分たちの考えをどう理解してもらおうか。グローバル化に必須の言語能力です」



——日本人の「説明力」を鍛えるためにも有用である、と？

「そうです。そもそも日本人が日本語を使うときも、『言いたいことが素直に伝わる』ということがもっと重視されるべきだと思います。行政、医療、法律などの専門家が一般の人に伝えるとき、難しいことを難しく話したがる傾向がある。私はこれを『難しさへの信仰』と呼んでいます。『よらしむべし、知らしむべからず』という論語の言葉がありますが、説明はせず、こちらの言うことを聞いていればいいんだ、という傾向は今も続いています」

——過去にも、日本語を簡単にしようとする運動がありました。うまくいきませんでした。

「ネイティブは、言葉の変化に強い抵抗感を抱くものです。1980年代に『簡約日本語』を唱えた言語学者がおり、新聞紙上でも議論が起きました。文法に制限をかけ、『旅行をします人』といった言い方をしますが、強い反発を受けて定着しませんでした。先駆的でしたが、言語学的なつくりが稚拙でした」

「明治初期には福沢諭吉が、難しい漢字は使わない方がいいと主張していました。江戸時代には、難しい漢字を使う支配階層だけが知識を独占していたので、広く一般に知を共有するためには不必要に難解な言葉を使わない方がいい、と考えたのです。現代でも、難しい熟語や外来語を使う方が教養があるとみられがちですが、表現や論理構成の分かりやすさに価値を置く方向が望ましいと、私は思います」

——日本語を「民主化」すべきと言っているように聞こえます。

「煎じ詰めれば、そうなるかもしれません。誰でも伝えたいことがあれば、つたない表現でも何とかして話そうとする。それは主体的に生きようとする上で、人間の尊厳にかかわる大切なことです。そんなとき、文法におかしいと馬鹿にするのではなく、何を言おうとしているのか、その中身を受け止めるべきです」

「例えば、中国語は方言が多く、地域で言葉が違うことを前提としているので、発音や文法の間違いに寛大です。英語にしても、ネイティブ同士のコミュニケーションは全体の4%だけで、75%はノンネイティブ同士のやりとり、つまり国際英語だと言われます。英語はすでにネイティブだけのものではありません。中国語も英語もいわば『寛容な言語』であり、そんな国際語に日本語も近づくべきだと私は思います」

「日本語を、限られた日本人だけのものと決めつける必要はない。福沢諭吉も、そういう狭い考えを批判していたのでしょう」

——日本語を通じて、社会を寛容にするということですか。

「『やさしい』には、『易しい』と『優しい』の両方の意味が込められています。実際のコミュニケーションでは、どうしたら相手に伝わるだろう、と思う気持ちが最初にあるはず。耳が遠い高齢者や語彙が少ない子どもに対して、私たちは言葉を調整して話しています。それが、まさに『やさしい日本語』です。外国人に対してだけではなく、ハンディを持った多くの日本人にとっても、やさしい言葉なのです」

\*

いおりいさお 1967年、大阪府生まれ。一橋大学国際教育交流センター教授。専門は日本語教育、日本語学。著書に「やさしい日本語—多文化共生社会へ」など。

#### ■「日本ではこう」と済まらずに 多言語電話通訳企業勤務、カブレホス・セサルさん

中学1年で家族と来日したときは、日本語ができず、小学校6年に編入しました。当時はまだ外国人は珍しかったので、水槽の金魚のように囲まれてじろじろと見られました。周囲の同級生が何を話しているのか、まったく分かりませんでした。

基礎の日本語テキストを懸命に勉強し、「あなた方は」と話しかけると、笑い声が響きました。当時の私には、何が間違っているのか理解できなかつた。あなたたち、君たち、みんな、おまえら。どの言葉を使えばいいのか。日本語は複雑です。

それが今では、行政機関と日々、日本語でメールのやりとりをし、ウェブにコラムを書いています。小学生から大学生まで、日本生まれの子どもが4人いますが、下の2人はほとんどスペイン語ができません。

来日して間もない頃、弟が交通事故に遭いました。医師の説明を親に通訳したのは私でした。「前頭葉に血の塊があります」と言われ、「血」は分かるけれど、「前頭葉」や「塊」が分からない。必死でした。

これをきっかけに、南米日系人のコミュニティーで通訳をすることが増えました。当時は日本語の語彙(ごい)が足りず、知らない言葉を聞くと、「分かりません。どういう意味ですか」と易しく言い換えてもらっていた。「やさしい日本語」はありませんでしたが、自然と似たようなことをしていたのです。

多言語通訳サービスの会社で働いていますが、日本に初めて来た外国人をサポートするとき、最も説明に困るのが、印鑑登録や年金、健康保険の加入などです。制度や文化的背景を知らないと理解できません。日常生活でも、学校でなぜ上履きが必要なのか、何万円もする制服をどうして買わないといけないのか、分からない。

そんなとき、「日本ではこうだから。以上」で済ませるのは一番良くない。「やさしい日本語」は、日本人の側こそ意識する必要があります。日常使う日本語とは大きなギャップがあるでしょうが、まごころにならって、外国人に寄り添う気持ちになってほしい。

外国人と日本人の間には、言語の壁と文化の壁があります。実は文化の壁の方が圧倒的に高いのですが、まずは言語の壁を乗り越えないと、そこにたどり着けないのです。(聞き手・ともに真鍋弘樹)

\*

Cabrejos Cesar 1979年、ペルー・リマ郊外に生まれる。多言語による電話通訳サービス企業「ランゲージワン」勤務。

---

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.